

報道 「二科会と春陽会 合流の氣運すゝむ」
帝展に對する在野戦線 やがて生まるゝ一大団体 (8)

『中外商業新聞』昭和六年三月二十六日

美術界在野戦線の統一（帝展に對して）といふ事は二、三年前から一部識者の間において盛んに唱へられ、そしてそれは「時」が自から解決するに相違ないともいはれてゐたところがその予断的中して、しかも往來美術界に行はれた一般的常識の裏をかいて、二科会と春陽会とが同じ目的のためにひそかに合流せんとして、その運動はすでに二、三分の処まで実行の域に進められてゐる様子である。但しその経過については今の処まだ極

秘の扉に閉じられて、誰の口からも漏れてゐないが、その条件として挙げられるのは、

第一—在野戦線の統一によつて一層その存在の領野を拡大すること。

第二—分裂より分裂への全体的傾向を、この在野戦線の統一といふ事によつて、逆に合同より合同へと進め、次第に一元的研究極的の大きな美術世界を顕現すること。

第三—現行の美術をしてあく迄もその本道に立返へらせ、併せてその正

当な鑑賞を確立させること。

以上の三つであつて、勿論その実現の爲には全部今までの行懸りを捨てて、輝かしい理性の導きに従はうといふのである。そしてこの目的を実現する順序としては、差当たりその前提として二科会も春陽会も当分は会をそののまま存置して展覧会も開けば、研究所も続けてゐてなるべくは明年——然らざれば明後年までに**解決**の機会を円熟させて、ここに二つの会はその名前を歴史の幕に織込んで、新たなる一個の団体の名の下に生れ変らうといふ事にあるらしい。そして春陽会では、裕伊之助、小山周三、鬼頭甕二郎、林俊衛、の四氏がその運動の先頭に立ち、二科会では有島生馬、山下新太郎、石井柏亭、正宗得三郎、中川紀元氏等がその意思の下に動き、別に春陽会の小杉放庵、森田恒友、山本鼎、倉田白羊の四元老及び木村莊八、足立源一郎、石井鶴三、中川一政の四現任幹事が暗黙の間に、それが成功に向ひ援護的立場にたつといふ陣立てが出来てゐる——以上の話は去る二

月十日、十一日、十二日と三日間に亘り、或は永代橋際の都川に、また上野精養軒と秘密の漏洩を恐れて移動本部の戦法に出た二科会の総会で初めて協議されたものであつたといはれてゐる。

受身の形の二科会 しかしその趣旨に一人の異議なし 更に聞くところによると、その協議は二科会が受身の形であつたらしいが、その席に集つた二科会のほとんど全員は、趣旨において一人として異論をはさむ者はなかつた。ただその実現の方法と時期との二点に関して、二科会そのものとしての決定的意見の一致を見なかつたために、一応の理由は「何分にも二科会としては、独立美術協会の分離事件があつてまだ日もたたない事であるから、今直ぐに合併を承認するといふ事もどうかと思はれる。しかし早晚賛成の出来ない事ではない」云々で以て後日の考慮が内部的に約されてゐる様子である。

曾ては犬と猿の民間の二大洋画団体 他の団体もまた合同の氣運へ

二科会が帝展から分離したのが大正三年で、今日まで帝展と對抗して展覧会を開くこと十八回、現に会員廿三人を擁し、会友約廿人、会員外の出品作家およそ五百人が数えられる。

春陽会は、創立後展覧会を開くこと九回、会員廿二人、会友十七人、出品作家四百人といふ、共に民間の二大洋画団体で、その実績と勢力とは共に帝展第二部を凌ぐものとされてゐた。この二つの会が、互に合併

を意識しつつ歩み寄つた心持。それにしてもあの犬と猿との仲が、いつの間にも、また何故にかくはこんで来たのかと、誰もが疑惑の目をみはると共に、早くも一部ではこの場合、梅原龍三郎、川島理一郎氏等の国画会も、児島善三郎、中山巍、伊藤廉氏等の独立美術協会などの団体もこの大勢に支配されて合同また合同と、それこそ意外の事実を展開させるのではないかなどとの取沙汰がささやかれて、しかもそれが一つの輿論を作るやも知れぬ力さへ持つに至つてゐる。

関係者の意見をきく

右についてその要所〳〵の人達の意見を聞いてみる。

○

春陽会 小杉放庵氏

僕たちがするといふよりも、これは寧ろもつと新進の諸君の働きに待たねばならないと思つて、その事は裕君その他にも云つて置いた。何しろいつの間にか社会的情勢も違つて来てゐる事だから、そうするのも悪くはない。又必ずしも出来ない相談ではあるまいかと思ふ。然し無理は禁物であろうから、徐ろにその時を招来させ、そこで一番大同団結出来るのがいいだらう。痴人の夢！ まさかさうでもあるまい。一頃とは時勢が變つて来てゐるんだから、それにこの事は世間の人も先刻賛成らしが一体どんなもんかな。

二科会 有島生馬氏

○
 話はいかにも立派です。立派すぎるくらいです。勿論賛意を表したからこそ私が取次役にあたつたのです。一度に話がまとまらなかつたのは残念ですが、これは急いで出来る性質のものとは思ひません。

春陽会 木村莊八氏

○
 私は、その事には直接触れてはゐませんが、美術界の在野戦線の統一と、その戦力の充実と、影響の加増などといった事から、春陽会と二科会とが合体するといふのは、ほんとうに愉快なそして事実効果のある事だと考へてゐます。分裂を統一へ還元する事が、可能であるかないかは、大いに議論の余地もあらうが実際のところ、さうした方が決定的に一番いい場合である以上は、その事の為の考へはドン／＼と運ばれる可きです。今日の美術界には団体が林立して、色々な意味からうるさいといふ点では全くお互いつこです。又事実世間もさう感じてゐる事でせう。若しもこの二会の合併がうまく行くとすれば、ほんとうにしめたものです。

二科会 山下新太郎氏

○
 今直ぐに合併するといふ事は無理です。何しろ二科動揺の声のまだ止むか止まない時なのですから。うっかりそんな事をやると、却つてわるく受

取られる心配があります。折角いいと信じてやつても、その受取られ方がわるくては助かりませんよ。それに春陽会は必ずしも事を急いでゐるといふ訳でもなささうです。誰がどういふ風な話で相談にあづかつたか、それは一切申されません。然しほんとうに大きな広い心持からわが美術界をながめますと、その在野の戦線を固め、そして画事をもつと真剣に立派にさせるといふ事が、いかに大切かといふ事を知ります。